

らう。

ヤスタウチ 安田氏 尊卑分脈に、林六郎光明の三男安田三郎惟光がある。石川郡上安田若しくは北安田を領したのであらう。越登賀三州志故墟考に、安田館のことを叙して、惟光の子に林弘二郎家朝がある如く記したの

は誤で、家朝は惟光の兄林次郎光茂の子である。父を庄太夫というた。組外に列し、八人扶持、十五俵を受け、後定番御馬廻に轉じ、寛保三年料紙奉行に任じ、明和六年十月七十五歳を以て歿。子孫藩に世襲する。

ヤスタケナリノリ 安武誠仙 通稱逸角。字は元藏、竹莊はその號、又香島居士というた。父元周は寛政中鹿島郡多根より七尾に移つて醫を業とし、文化五年順成を擧げた。順成四歳にして父を喪ひ、後京師に赴きて醫を小森桃塲に學び、又書を藤森晋山に習ひ、歸郷の後再び上洛して小石榎園・新宮涼庭の術を受け、刀圭の傍子弟を導き、書を積むこと數萬卷、その藏する所を香島文庫と名づけた。明治四年正月四日六十五歳を以て歿。

ヤスタダジュンセイ 安田順成 通稱順成、字は元藏、竹莊はその號、又香島居士というた。父元周は寛政中鹿島郡多根より七尾に移つて醫を業とし、文化五年順成を擧げた。順成四歳にして父を喪ひ、後京師に赴きて醫を小森桃塲に學び、又書を藤森晋山に習ひ、歸郷の後再び上洛して小石榎園・新宮涼庭の術を受け、刀圭の傍子弟を導き、書を積むこと數萬卷、その藏する所を香島文庫と名づけた。明治四年正月四日六十五歳を以て歿。

ヤスタダクラ 安田忠倉 通稱仙次郎。保右衛門の四子。文政四年組外として二十人扶持を受け、十二年新知百二十石に上り、天保四年歿した。

ヤスタノカンコロシ 安田の疋殺 石川郡安田の鍋木家に傳來する小兒五疋の藥で、天正中永壽法師が七面菩薩の靈告によつて創製したものといふ。
ヤスタノブモト 安田布蓄 通稱吉次郎、新兵衛。文化四年父六平の遺知百石を襲ぎ、外

作事奉行・御郡奉行兼改作方・御預地方御用等に歴任し、天保八年頭並に至り五十石を加へた。

ヤスタハチマンケウ 安田八幡宮 石川郡北安田に在つて、承應中から當山派の山伏金性院が奉仕した。今は存せぬ。
ヤスタヘイエモン 安田平右衛門 祿加増共に百八十石を受け、延寶五年歿。子孫世々藩に仕へる。

ヤスタホ 安田保 石川郡に在つた。親元日記別録に、『宇佐美越中守盛久文明十四年八加州安田保内田地六段事云々』と見える。後世山島郷内に北安田・上安田がある。
ヤスタヤスエモン 保田保右衛門 初名市郎右衛門。本多安房守に仕へて七十石を受け

たが、天明四年三月新知百石組外並に召出され、御馬方御用を勤め、享和元年歿した。その嫡統は、三代嘉次之助文政中出奔して斷絶した。
ヤスタリエモン 安田理右衛門 前田利家に仕へて二百俵を領した。子孫藩に世襲する。
ヤスノブ 安信 越後の刀工山村正信の子で、初はまた正信というた。後加賀に移り、野々市に住し、『白山水銀之』と銘じた作品がある。應永四年歿、享年四十三。

ヤスハラガハ 安原川 石川郡犀川の支流で、神合(もと赤土・鷲森)で本流に注ぐ。
ヤスハラサンエモン 安原三右衛門 諱は満貞、又清定にも作る。石川郡下安原の人。三池流の算法を笹塚忠左衛門有義に學び、自ら居村を測量し、砂丘を拓き土堤を築き、以て河水排出の工事を成し、全資産を之に授じたが遂に功を奏しなかつたといふ。文政頃の

人。
ヤスハラハヤト 安原隼人 祿千石、慶長十九年十月大坂の役に先軍の銃將であつた。隼人の名は前田綱紀入國の比まで見えるが、その後は詳かでない。
ヤスヒコサマノスケ 安彦左馬助 初め丹羽長重の臣で、左太夫と稱し、慶長五年淺井騷の合戦には丹羽方合槍の一人であつた。同年長重の敗勢せられた後、左馬助も浪人となり、出雲の堀尾山城守に仕へ、次いで十一年前田利長に仕へて千石を賜はり、十九年大坂の役に第五隊の銃將となつた。其の子左馬の時、寛永十三年伯父某が蜂須賀阿波守の家老成瀬主計と口論したるを以て、之が加勢の爲に祿を捨て、妻を安見隠岐の家に返し、室内の疊表を改め、番具足を並べ立て、退去した。其の弟五郎兵衛・兵部八助は皆小々將に召出されて居たが、三人共左馬助に先立つて歿した。

ヤスヒラ 泰平 加賀の刀工。初代泰平は二代勝國善三郎の二男で、勝國の弟伊豫大掾勝家の後を受けたもの。通稱松戸七郎。初め二代勝家といひ、四十歳の頃泰平と改銘した。加州住橋泰平・陀羅尼泰平又は泰平と切る。寶曆十二年四月四日歿、齡八十二。二代泰平、亦松戸七郎といひ、天明五年加賀藩の御細工者となり、文化五年七月九日六十五歳を以て歿した。加州金府住橋泰平・泰平又は北齋鍛工陀羅尼橋泰平作寛政十年二月社日など、切る。
ヤスヒロシヨウ 安弘庄 續寶簡集建治二年七月に加賀國安弘莊が見える。安弘庄の所在は明らかでない。

ヤスマチ 安町 鳳至郡石休場の内の小字。石休場の内、久手川七ヶ村の入合地に發して、半許とある。しかれば神田川のこと、その名を落合が石休場の小字安町にあるから、この名を得たものである。
ヤスマカツキ 安見勝之 通稱右近・隠岐。初め豊臣氏に仕へたが、後前田利長の臣となつて祿六千石を受け、慶長五年致仕した。子隠岐元勝はその子(諸士系譜また隠岐に作る)と共に配流せられ、孫興左衛門新知三百石を得て、後系藩に世襲する。

ヤスマサヒデ 安見政英 通稱方六。もと小堀氏。祿二百石を受け、馬廻組に班し、鎗劍の秘を極め、兼ねて俳句に長じた。年四十四で前田齊泰の子延之助の傳となり、六十にして割場横目に任じ、安政元年七十歳で歿。
ヤスミモトカツ 安見元勝 通稱右近・隠岐。父は隠岐勝之。元勝慶長五年父の致仕後家祿六千石を襲ぎ、大坂の役に従ひ、遂に一萬四千石(内四千石與力知)に至つたが、寛永十三年罪を獲て能登島の向田に謫せられ、三十人扶持を賜はり、數年にしてその地に歿した。元勝和歌を能くし、書に巧みに、最も銃術に精しかつた。

ヤスヨシ 安吉 石川郡山島郷に屬する部落。
ヤスヨシイヘナガ 安吉家長 ↓オホクボイヘナガ 大窪家長。
ヤスヨシジヨウ 安吉城 石川郡安吉に在つた。寶永誌に、この村の領に城跡があり、

石を以て、後系藩に世襲する。
ヤスマサヒデ 安見政英 通稱方六。もと小堀氏。祿二百石を受け、馬廻組に班し、鎗劍の秘を極め、兼ねて俳句に長じた。年四十四で前田齊泰の子延之助の傳となり、六十にして割場横目に任じ、安政元年七十歳で歿。
ヤスミモトカツ 安見元勝 通稱右近・隠岐。父は隠岐勝之。元勝慶長五年父の致仕後家祿六千石を襲ぎ、大坂の役に従ひ、遂に一萬四千石(内四千石與力知)に至つたが、寛永十三年罪を獲て能登島の向田に謫せられ、三十人扶持を賜はり、數年にしてその地に歿した。元勝和歌を能くし、書に巧みに、最も銃術に精しかつた。

石を以て、後系藩に世襲する。
ヤスマサヒデ 安見政英 通稱方六。もと小堀氏。祿二百石を受け、馬廻組に班し、鎗劍の秘を極め、兼ねて俳句に長じた。年四十四で前田齊泰の子延之助の傳となり、六十にして割場横目に任じ、安政元年七十歳で歿。
ヤスミモトカツ 安見元勝 通稱右近・隠岐。父は隠岐勝之。元勝慶長五年父の致仕後家祿六千石を襲ぎ、大坂の役に従ひ、遂に一萬四千石(内四千石與力知)に至つたが、寛永十三年罪を獲て能登島の向田に謫せられ、三十人扶持を賜はり、數年にしてその地に歿した。元勝和歌を能くし、書に巧みに、最も銃術に精しかつた。

石を以て、後系藩に世襲する。
ヤスマサヒデ 安見政英 通稱方六。もと小堀氏。祿二百石を受け、馬廻組に班し、鎗劍の秘を極め、兼ねて俳句に長じた。年四十四で前田齊泰の子延之助の傳となり、六十にして割場横目に任じ、安政元年七十歳で歿。
ヤスミモトカツ 安見元勝 通稱右近・隠岐。父は隠岐勝之。元勝慶長五年父の致仕後家祿六千石を襲ぎ、大坂の役に従ひ、遂に一萬四千石(内四千石與力知)に至つたが、寛永十三年罪を獲て能登島の向田に謫せられ、三十人扶持を賜はり、數年にしてその地に歿した。元勝和歌を能くし、書に巧みに、最も銃術に精しかつた。

ヤス